

女子大学生を対象とした組織キャンプの実践と 学内キャンプの展望

山下 玲香

1 はじめに

本学における教養演習Ⅱ（2年生必修科目・通称「2年ゼミ」）では、本学科に所属する教員の専門分野に特化した独自のシラバスで構成されている。筆者が担当をしている2年ゼミ（以下「2年山下ゼミ」）では、自然を活用した様々なアクティビティを通し、自ら積極的に活動に取り組む姿勢や、仲間と協力する力、柔軟に対応する力などを養うことをねらいとしている。具体的な活動内容は、学内における自然散策やタケノコや梅などの収穫、ロープワークや応急処置の練習、薪割り、火おこしなどである。また、夏から秋にかけて学外の野外施設を利用し宿泊を伴う組織キャンプの実践も行うことになっている。

しかしながら、2020年度以降の2年山下ゼミの組織キャンプ実践は、新型コロナウイルスの影響を多大に受けており、限られた条件の中でのゼミ活動に苦戦している。特に、キャンプの醍醐味であるテント泊はおろか、仲間と調理をすることや食事ともにもすることまでも危ぶまれる時期もあり、試行錯誤をしながらのゼミ活動であった。制限の多い状況の中で、授業の質を保証しつつ目的達成に向けて十分な野外活動を提供できるのか不安ではあったが、この数年を振り返ってみると、キャンパスの自然や施設整備を活用することで、新たな野外活動のスタイルが見えてきたように感じる。

そこで本研究では、19年度から22年度にかけて2年山下ゼミで実践した主な野外活動を整理するとともに、大学のキャンパスを活用した野外活動の課題を検討することとした。

2 教養演習Ⅱの実施方法

2-1 実施時間と場所

ゼミ活動は通年で毎週木曜日3限に行われる。木曜4限が「卒業研究」の授業で引き続き2年ゼミの科目であるため、デイキャンプなどのある程度まとまった時間を要する活動や学外での研修を行う場合は、時間割を変更して3限から4限までゼミ活動をする、あるいは土曜日や日曜日、夏休み期間中などに振り替えて授業を行っている。

基本的にゼミはキャンパス内の小教室（2号館3階）で行われるが、2年山下ゼミの活動内容は実働的なものが多いため、学内のあちらこちらで行っている。例えばタケノコ掘りは体育館裏やゴルフ場横の竹やぶで、キャンプ道具の確認作業や使い方の練習は筆者の研究室がある研究管理棟で、テント張りの練習は7号館前の芝生やセミナーハウス横で、といった具合だ。図1は本

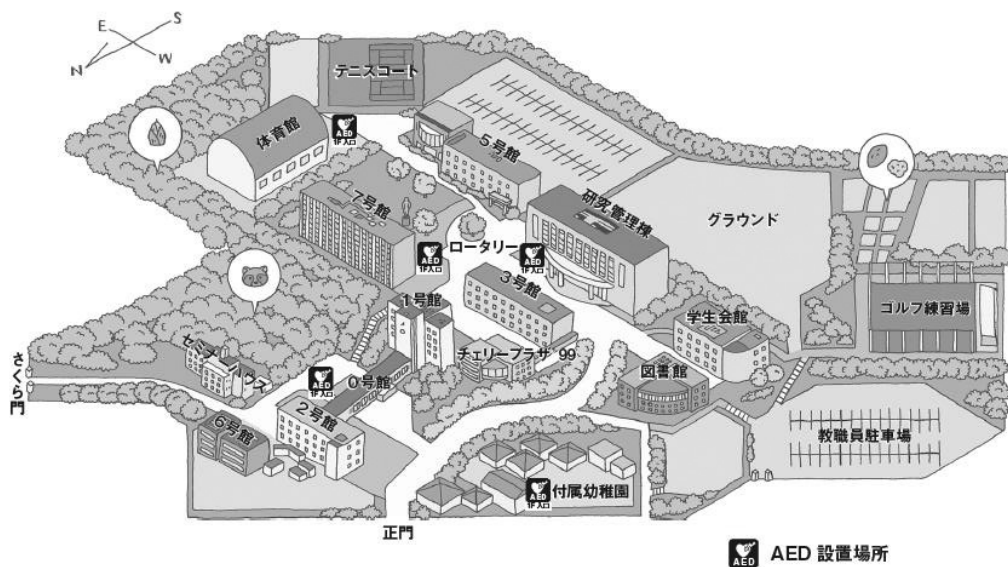


図1 名古屋短期大学キャンパス地図
(名古屋短期大学2022 Campus Life Guide p. 183より)⁽¹⁾



図2 セミナーハウス1階ロビー
(同上 p. 182より)⁽¹⁾



図3 セミナーハウス2階宿泊室
(同上 p. 182より)⁽¹⁾



図4 セミナーハウス3階宿泊室兼作業室
(同上 p. 182より)⁽¹⁾

学キャンパス内の地図である。キャンパスは小さいながらも自然が豊かで、畑や様々な果樹もあり、運動施設としては体育館やテニスコート、グラウンドなどもある。また、セミナーハウスもゼミ活動で活用しており、とくに22年度はその使用頻度は高かった。セミナーハウス（95年7月完成）は約100名が一度に宿泊することのできる3階建て屋上付きの宿泊研修施設で、ゼミやサークル、委員会活動での研修会議や親睦など多目的に利用することができる（図2、3、4）。

学外での活動では、年度によっては異なるが、あいち健康プラザ（愛知県大府市）や尾三消防本部豊明消防署（愛知県豊明市）、中部大学生命健康科学部スポーツ保健医療学科（愛知県春日井市）などへ赴き、健康体験活動や応急処置などの学習している。中部大学生命健康科学部スポーツ保健医療学科は救急救命士や健康運動や障がい者スポーツなどのスポーツ指導者として活躍する人材育成を行っている学科で、その中でも救急救命士を志望している学生数名から心肺蘇生法や三角巾を用いた固定の方法などを教えていただく機会（以下、「応急処置講習」）を設けている。

また、組織キャンプの実践では豊田市総合野外センター（愛知県豊田市）、愛知県野外教育センター（愛知県岡崎市）などを利用している。豊田市総合野外センターは、豊田市の市街地から東へ約16kmの所に位置し、愛知高原国定公園の六所山、炮烙山一帯の自然を生かして、宿泊体験を中心とした野外活動や集団活動等を行うための青少年育成施設である。室内での宿泊の他に常設テントでの宿泊も可能で、場内ではハイキングや常設アスレチック、川遊びなど様々なアクティビティが楽しめる。愛知県野外教育センターは岡崎市北東部、新城市（旧作手村）との境に位置する標高600mの山腹に立地し、宿泊部屋や食堂を備えた6階建の本館や、バスケットボールコート2面分の体育館、炊事場や運動場、ファイヤー場といった複数の屋外施設がある。テント泊は不可となっているが、宿泊棟の最大宿泊人数は252名で、各階にミーティングルーム、多目的室などが備わっているほか、管理棟には288席の食堂や4つの研修室などがあり、非常に使い勝手の良い施設である。

2-2 野外道具

2年山下ゼミにおいて学生が使用する野外道具（テント、寝袋、焚き火台、ランタン、食器など）は、基本的に筆者が研究のために購入した道具や学校にある道具を使用している。ただし、コップについては使用頻度も高く、ゼミ活動の思い出となるアイテムであるため、ステンレスなどの金属製のものを必ず学生が一人一つ各自で購入することとしている。これについては、安さと種類の豊富さから100円ショップなどの量販店のものを推奨している。学生によっては自身のコップや蓋に油性ペンやマニキュアなどで名前やイラストを描いた上にセロハンテープを貼りつけたり、カラビナをつけたりして他のゼミ生のコップと混同しないよう各自で工夫をしている。また、豊田市総合野外センターや愛知県野外教育センターでは、調理器具の貸し出しも行っているため、基本的には学生自身が購入する必要があるものは食材といったところだ。

調理や焚き火のために使用する薪は、キャンパス内の手入れのために本大学職員によって伐採された木（丸太状）を、手動油圧式の薪割機やオノを用いて薪割をして指導者や学生が準備をしている。割ってすぐの薪は水分を含んでいるため、乾燥するためにストック台で保管をする。実際に火を起こす際に用いる薪は、前年度に割って乾燥させておいたものを使用している。つま

り、学生が使う薪は先輩方が割ったものであり、自分たちが割った薪は後輩が使用することになる。

3 近年の教養演習Ⅱにおける組織キャンプの実践報告

19年度から22年度で実践した、2年山下ゼミにおける主な野外活動内容について、表1に示す。4月から7月にかけてロープワークや簡単な応急処置などの野外活動に必要な基礎的な知識と技術、野外活動の道具の使い方を学ぶ。夏休みから10月頃の期間には、実際に学内外において学んだ知識を活かすべく、組織キャンプを実践している。また、年度によって異なるが野外活動以外にも健康体験活動や消防署の見学などを実施している。各年度の活動内容の特徴について次にまとめる。

表1 19年度から22年度における教養演習Ⅱ（2年山下ゼミ）の主な野外活動内容

	19年度	20年度	21年度	22年度
4月	自然散策	遠隔授業：ロープワーク	タケノコ掘り 自然散策	タケノコ掘り 自然散策
5月	ロープワーク	遠隔授業：止血固定法、RICE法などの応急処置	ロープワーク 畑（サツマイモ・落花生） 梅の収穫	ロープワーク デイキャンプ
6月	健康体験活動（学外）	デイキャンプ（学内）	応急処置講習（学外）	野外道具の使い方と実践
7月	応急処置講習（学外） 野外道具の使い方と実践	野外道具の使い方と実践 遠隔授業：キャンプ計画書作成	野外道具の使い方と実践	野外道具の使い方と実践
8月	2泊3日キャンプ（学外）	遠隔授業：キャンプ計画書作成	野外道具の使い方と実践	野外道具の使い方と実践
9月	自然散策	自然散策 拾った自然で工作	野外道具の使い方と実践	1泊2日キャンプ（学内）
10月	拾った自然で工作	豊明消防署見学（学外）	デイキャンプ（学外） 農作物の収穫（サツマイモ・落花生・菊芋）	1泊2日キャンプ（学外）

3-1 19年度について

ゼミの構成は2年生12名、教員1名の計13名であった。このゼミは筆者にとって初めての2年生ゼミであり、女子大学生向けにどの程度の内容で野外活動が行えるのか、試行錯誤の学年であった。「様々な身体活動を取り入れた体験活動を実践する」ことをゼミの目標とし、まず手始めに4月に学内の自然散策をし、5月にロープワークを実践した。キャンパス内の体育館裏には竹林が広がっており、大きく太い竹を用いてロープの結び方や「蜘蛛の巣」という、自由に張り巡らせたロープに触れないようにくぐって遊ぶネイチャーゲームなどを指導した（図5）。6月にはあいち健康プラザ（愛知県大府市）にて健康体験活動を行った。健康チェックを受診した後、健康チェックの結果や健康の維持増進などに関する講義を受け、およそ8時間かけて体験活動を行った。主な体験活動は、トレーニングジムでのマシンを使ったトレーニングや、室内プールでの水泳や水中ウォーキング、健康科学館での健康に関する学習などであった。昼食はロビー

などの休憩スペースでお弁当を持ち寄って食べた。なお、生理中の学生については室内プールでの活動時間はアスレチック遊具などがある屋外にて学生のみ（3名）で自由散策を行うよう指示をした。普段あまり運動をしない学生たちにとって、一日かけての体験活動は体力が継続するか不安であったが、それぞれの活動時間内において自分が好む運動を自分で選択したり、適度な休憩をとったりと、自分のペースで無理なく活動することができた。この活動を通し、長時間のゼミ活動に自信がついたため、夏以降は本格的にキャンプ活動の準備を行った。7月に中部大学での応急処置講習を受け、野外道具（調理用具、寝袋など）の使い方と実践を学内でを行い、8月末には豊田市総合野外センターにて2泊3日の組織キャンプを行った（表2）。このキャンプでは食事作りやネイチャーゲーム、魚つかみ、キャンプファイヤーなどを実践した（図6）。食事は基本的には学生が献立を考え、流しそうめんをする際にはうどんを手打ちし、流しそうめんの際に一緒に流して食した。宿泊は施設の常駐テントで1泊、管理棟の大部屋で1泊した。テント泊は一張りあたり3名の宿泊とした。なお、このキャ



図5 ネイチャーゲームの様子
(キャンパス内の竹林)

表2 19年度2泊3日の組織キャンプの日程表

	1日目 (8/30)	2日目 (8/31)	3日目 (9/1)
6:00			
7:00		朝食 (食堂)	朝食 (ホットドッグ、ミネストローネスープ) / 昼食の準備
8:00			
9:00	名短出発	うどん作り	
10:00			ネイチャーゲーム (ネイチャービンゴ、わたしの木など)
11:00	野外センター着 / 入所式 / アスレチック説明	流しそうめん・うどん大会 (そうめん、うどん、ゆで卵)	
12:00	昼食 (持参)		昼食 (五平餅、焼きおにぎり)
13:00	山での過ごし方・魚のさばき方 / ロープワーク講座・危険生物について / 箸・食器の制作 / サイトの設置	魚つかみ	片付け
14:00			点検
15:00		風呂 / キャンプファイヤー用井桁組み / キャンプファイヤーの打ち合わせ	退所式 野外センター出発
16:00	炊事場所説明 / 夕食 (ビビンバ、味噌鍋、餃子)		
17:00		夕食 (ピザ、ポトフ、魚塩焼き、漬物)	名短着
18:00	風呂		
19:00	出し物の準備 / 創作活動	キャンプファイヤー	
20:00			
21:00	テント泊	センター泊	
22:00			

※ 8月28日、29日キャンパスにて事前準備 9月2日キャンパスにて片づけ



図6 ニジマスの下処理の様子（豊田市総合野外センター）

ンプには、同大学の保育科2年ゼミ（親子キャンプ）が複数参加しており、魚つかみや流しそうめん、キャンプファイヤーなど、一部の活動は合同で行った。後期になると、学内の自然散策で拾った石を利用し、8月のキャンプで挑戦したストーンペイントを再度実践し、両作品を大学祭にて展示した。

2年山下ゼミのほとんどの学生が4月当初から野外活動だけでなく自身の体力面に対しても不安を抱いており、内向的な性格も相まって1つ1つのゼミ活動に真摯に向き合っていたように感じる。また、2泊3日の組織キャンプでは、キャンプに不慣れであることを学生自身が自覚していたため、かなりの時間を費やして下調べやしおりの作成をした。事前準備をしっかりと行うことで、キャンプ自体は大きな問題もなく無事に終えることができ、体力に不安のある女子大学生であっても2泊3日程度であれば十分に楽しめることがわかった。

3-2 20年度について

2020年度はまさにコロナ禍中であった。ゼミの構成は2年生9名、教員1名の計10名であった。2020年4月から5月にかけての遠隔授業期間にロープワークや応急処置などの学習を各自で行うよう Teams 上で指示をした。調べた結果やロープワーク実践の成果は Word に記録し、対面授業が開始された6月に紙面で回収をした。対面授業再開後すぐに学内でデイキャンプ（ストーンペイント、わたしのワンピースなど）を実践した。ストーンペイントの石はキャンパス内を散策して気に入ったものを各自見繕い、水道水で洗って乾かしたのちアクリル絵の具や油性マーカーでイラストを描いた（図7）。わたしのワンピースはA4またはA3の厚紙に下書きをし、カッターやはさみで切りぬいた後、カラーペンなどで彩色をし、キャンパス内を散策しながら写真を撮った（図8）。まだ昼食をともにすることはできなかったため、半日だけの体験活動では



図7 ストーンペイントの様子



図8 「わたしのワンピース」の様子

女子大学生を対象とした組織キャンプの実践と学内キャンプの展望

表3 学生が作成したキャンプ計画（原文を一部修正）

わたしのキャンプ計画 (S.Mさん)			
時間	1日目 (8月29日)	時間	2日目 (8月30日)
9:00	出発	6:00	起床
10:00	トイレ休憩などを入れながら到着 (朝ご飯もすませる)	6:20	朝ご飯準備 スクランブルエッグ、米 (お昼ご飯のおにぎりも作る)、ベーコン、ヨーグルト
10:30	テントを張るなど、注意事項の確認をする	7:40	ト
12:00	持参した昼食を食べる	8:20	朝食
12:45	川遊び 事前に遊べる川などを調べておく、魚釣り	8:50	片付け
15:30	(事前に許可を取る)、川でスイカを冷やしておく	12:00	プチ登山出発 自然を感じながら歩く
16:00	着替えなどを済ませ冷やしておいたスイカでスイカ割り	12:40	到着したらゼミで考えたゲームをする
18:00	夕食づくり	12:40	昼食 (朝作ったおにぎり)
19:00	サラダ、ピザ (生地を多めに作り夜食や次の日のご飯に使う)	13:30	下山
19:30	夕食	15:30	休憩をとり、ゼミで考えたゲームをする
20:30	片付け	16:00	簡単な流しそうめんをする
22:30	風呂 (マナーを守って入る) 自由時間お菓子パーティーもあり 次の日の予定をみんなで確認する 就寝	17:00	片付け キャンプ場出発 大学到着、解散 鮎を持っていく！ 全力で楽しむ！ 自然にたくさん触れる！
わたしのキャンプ計画 (K.Nさん)			
時間	1日目 (8月29日)	時間	2日目 (8月30日)
8:50	最終確認 (持ち物や気持ち、体調など)	6:00	起床
9:00	大学出発 (車で移動)	6:20	着替えや荷物整理など、朝の支度を行う
11:00	豊田市総合野外センターに到着 センター内見学	7:00	朝食 (前日の晩御飯を食べる)
12:00	少年自然の家で昼食をとる	片付け 昼食作り (昼食のメニュー: サンドウィッチ、チーズ、ミックスジュース、パンのみみ)	
14:40	天体観測場と山の資料館に行き、展示物を鑑賞する	7:40	荷物をまとめる
16:40	アスレチックエリアに行き、体を動かす (AかBに行く。他の建物との距離が近い)	8:00	出発して炮烙山へ向かう (おもいやりの道を通る)
16:50	雨天の場合は早めに青少年キャンプ場へ向かい、自由に過ごす	11:20	炮烙山到着
	青少年キャンプ場で荷下ろしする		早めのお昼を食べ、自由時間を少しとる
19:00	晩御飯作り開始 (翌日の朝食のために多めに作り、クーラーボックスに入れておく) 晩御飯のメニュー: 白飯、肉と野菜の炒め物、味噌汁、焼きリンゴ、フルーツの盛り合わせ	14:50	豊田市総合野外センター (駐車場) へ戻る
20:00	晩御飯を食べる	16:50	駐車場に到着し、トイレ休憩を挟み出発
21:30	片付け	16:50	大学到着
22:00	入浴 (2組に分かれて入る) 空いた時間で歯磨き、次の日の準備をする 皆で話し合いや1日の振り返りを行う 就寝		キャンプの振り返りや感想の伝え合い、体調の確認を行う その後解散 ※雨天時は炮烙山へ登らず、多目的ホールで自由に過ごす



図9 寝袋を用いたゲームの様子

あったが、2年山下ゼミがようやく全員そろっての最初の活動であったため、学生だけでなく筆者も心から楽しむことができたひと時であった。また、室内と屋外の行き来はあったものの、キャンパス内の自然を活用したネイチャーゲームを十分に実践することができた。7月上旬には野外道具の使い方と実践を行い、寝袋を使ったゲーム（図9）や屋外で学生が考えたゲーム（靴飛ばし、気配切りなど）を実施した。寝袋を使ったゲームは、誰が1番早く寝袋を収納できるか競う単純なルールではあるが、声を出すこともなく黙々と取り組めるため、コロナ禍にはうってつけの遊びだった。

残念ながら、前期が終了する直前の週で遠隔授業となってしまうため、夏休み中の野外活動を断念することとなった。その代替授業として1泊2日のキャンプ計画書を各自で作成することとした（表3）。後期がはじまると学内の自然観察や木の枝などを活用して木工をした。19年度よりも学内で過ごす時間が多く、また後期の大半は工作の時間になったこともあり、この年度は写真立てやリース、置物などの装飾品などを数多く制作した（図10～12）。とにもかくにも工作活動が多い1年間であったが、ゼミ生がそろって活動ができる喜びを感じるものであった。20年度の心残りは、宿泊を伴うキャンプができなかったことに尽きる。



図10 工作の様子



図11 学内で拾った花梨とドングリ



図12 学内で拾った松ぼっくりと枝

3-3 21年年度について

ゼミの構成は2年生6名、教員1名の計7名であった。21年度はコロナ対策も整い、4月当初から授業がスムーズに開始された。授業の際には換気や手指消毒を徹底し、調理実習などの複数が手を加えた食事は禁止となった。4～5月のゼミ活動では、学内の自然散策やタケノコ掘り（図13）、梅の実の収穫、ロープワークなどを行った。この年度の学生は「食事づくり」を楽しみにしている学生ばかりが集まったため、自分たちで野菜を育てたいとの要望もあり、5月当初にサツマイモと落花生を畑に植え、秋にかけて定期的に畑の手入れなども行った。6月には中部大学スポーツ保健医療学科での応急処置講習（心肺蘇生法、止血固定など）を行った（図14）。21年度は中部大学内に常設している救急車の中の見学に加え、運転席や助手席にも座らせていただいた。7月には野外道具の使い方と実践を行い、「寝袋チャレンジ」という動画を制作した（図15）。この企画は、学生がキャンパス内で気に入っている場所へ行き、寝袋に素早く入る様子を自ら動画に記録するというものである。この寝袋チャレンジで撮影した複数の動画は、後日学生が1本の動画に編集をし、学科のSNSや11月の大学祭の学科展示にて放映した。10月には愛知県野外教育センター（愛知県岡崎市）にてデイキャンプを行った（表4）。幸いなことに、後期の授業が開始した段階で、新型コロナに関する行動基準が緩和されたため、徹底した感染対策と衛生管理のもと食事を共同で作って食べることが可



図13 タケノコ掘りの様子（キャンパス内ゴルフ場横）



図14 応急処置講習の様子（中部大学スポーツ保健医療学科）



図15 寝袋チャレンジの様子（校内廊下）

表4 21年度デイキャンプの日程表

10月17日	
9:00	本宿駅集合
10:00	
11:00	昼食づくり
12:00	（鯖缶炊き込みご飯、餃子の皮ピザ、キノコの味噌汁、ガーリックバターチキン、じゃがバター、ポップコーン、フルーツポンチ）
13:00	
14:00	
15:00	アクティビティ（私のワンピース）
16:00	センター出発
17:00	本宿駅到着・解散

能となった。ネイチャーゲームよりも調理時間をしっかり確保したいという強いゼミ生の希望により、事前学習ではメニュー作りを入念に行い、デイキャンプ当日もセンターに到着してすぐ調理を開始し、3時間近く完成までに費やした。このときの昼食は鯖缶をつかった炊き込みご飯に、餃子の皮を二枚重ね、その上に野菜などを載せて焼いた餃子の皮ピザ、しめじやえのきなどのきのこをふんだんに使ったきのこの味噌汁など、計5種類であった。このほかにも、ペットボトル入りのサイダーを用いたフルーツポンチや手軽に調理できるポップコーンのおやつも調理した。このデイキャンプではネイチャーゲームをあまり実践する時間がなかったが、ゼミ生の目標であった野外調理は達成することができ、この経験が11月の野菜の収穫や2月のうどん作りにも大いに生かされた。

3-4 22年度の特徴

ゼミの構成は2年生8名、教員1名の計9名であった。4月は学内でタケノコ掘りや自然観察を行った。5月にはロープワークや学内でのデイキャンプに向け事前学習（キャンプに関する基礎知識の習得）を行い、5月19日の12時から17時にかけて、セミナーハウスにおいてデイキャンプを実施した。デイキャンプの内容は、野外炊事の環境づくり、バーベキュー、テント設営、



図16 テント張りの様子（校内車道横敷地の林内）

テント内でのレクリエーションであった。テントはセミナーハウスの入り口付近および校内車道横敷地の林内に6人用テントを1張ずつ計2張り設置した（図16）。セミナーハウス内の炊事場で食材を切り、屋外にてバーベキューを行った。バーベキュー後はテント内にて人狼ゲームや団らんなどを楽しんだ。6月から7月にかけては野外道具の使い方や実践、薪割などを行った。このとき撮影した寝袋チャレンジの動画は、21年度と同様に編集作業を学生が行い、大学祭にて放映した。

9月には学外での宿泊を伴うキャンプを実践する予定であったが、近隣のキャンプ施設の混雑により学外での開催は断念し、代わりに学内で開催することとした。徐々に小中学校での野外活動が再開されたようで何よりである。セミナーハウス内での宿泊は本学としても2年ぶりであったため、事前に職員や2年山下ゼミ生が入念に掃除を行い、夏休み期間の9月15日から16日の1泊2日で学内キャンプを実施した。日程は表5のとおりである。実施日の前日には掃除の他に、しおりの作成やセミナーハウスへの道具類の搬入などの事前準備を行った。当日は10時からセミナーハウス内にて開会式を行い、セミナーハウス使用についての諸注意やキャンプのルールを確認した。この日の名古屋の日中最高気温は31度で、室内でもかなりの暑さを感じたため、常に冷房を稼働させて活動をした。また屋外での活動時はできるだけ帽子をかぶったり、こまめに水分をとったり、日陰で作業するなどの工夫をした。なお、基本的に昼食の下ごしらえと皿洗い、水汲みなどはセミナーハウス内のキッチンで行い、火を使った調理や食事などはセミナーハウス内のガレージやセミナーハウス横の屋外（この

表5 22年度組織キャンプ（セミナーハウス）の日程表

	1日目 (9/15)	2日目 (9/16)
7:00		起床、ラジオ体操
8:00		
9:00		
10:00	セミナーハウス集合/開会式 ストーンペインティング（石拾い）	朝食の準備（雑炊）、昼食の準備（ホットドッグ）
11:00		
12:00	昼食づくり（そうめん）	ストーンペインティング（色付け）
13:00	竹箸づくり、薪割	昼食、団らん
14:00		片づけ、荷物の撤収（研究室）
15:00	テント設営、ブルーシート遊び、団らん	閉会式/解散
16:00		
17:00	夕食の準備（餃子の皮ピザ、サラダスープ）、風呂	
18:00		
19:00		
20:00	セミナーハウスかくれんぼ	
21:00	夜のキャンパス内散策	
22:00	就寝	

※道具類の搬入は前日（9月14日）に実施

時は事前にブルーシートで日よけを作っていた）で行った。開会式後、ストーンペインティング用の石拾いや火起こし、昼食の準備（そうめん）など手分けして行い、昼食後は各自で竹を削って箸を作ったり、薪を割ったり自由に過ごした。その後、全員でセミナーハウス3階の研修室にテントを2張設置し、様々なサイズ（1.8m×1.8m、1.8m×2.7m、2.7m×3.6mなど）のブルーシートを用いて寝袋を作ったり、秘密基地を作ったりして遊んだ（図4、17）。夕食づくりと並行して、セミナーハウス内の浴室を利用して交代で入浴し、食



図17 ブルーシート遊びの様子（セミナーハウス3F）

後の片づけが完了したところでセミナーハウス内においてかくれんぼをした。また、星の観察も兼ねてキャンパス内を散策し、21時30分にはセミナーハウス内へ戻り就寝の準備をした。翌日は起床して身支度を整えた後、屋上にてラジオ体操を行ってから朝食と昼食の準備をした。昼食の当初の予定は棒パンであったが成型するには生地がゆるすぎたため、フライパンでホットケーキを焼き、あらかじめ串にささっているフランクフルトを挟んでホットドッグにした。午後は前日に準備した石にペイントをしたり、適宜昼食をとったり、団らんをしたりと、14時まで各々自由に過ごした。このとき筆者はガレージにアウトドア用の椅子を準備し、メスティンで湯を沸かしコーヒーを作って休憩をしていた。14時から全員で手分けして片づけや掃除などを行った。朝食と昼食の準備を並行して行ったため、焚き火台も十分に消火できており、すぐに片づけに取り掛かることができた。翌週のゼミでは1時間かけてこのときの活動について学生のみで振

表6 22年度組織キャンプ（セミナーハウス）の振り返りで学生がまとめた意見

	分類	学生の意見
良 か っ た 点	時間配分	プログラムを前倒して進められた
	時間配分	時間を有効に使えた
	時間配分	片付け素早く出来たため、帰宅時間が早まった
	時間配分	お風呂に効率的に入ることができた
	プログラム内容	アクティビティが楽しかった
	プログラム内容	事前準備のおかげでストーンペインティングは早くできた
	プログラム内容	あらかじめ削りやすいサイズだったので箸づくりは簡単にできた
反 省 点	環境	寝るときの寒さ（テント内の温度調節）ができなかった
	環境	クーラーの管理はどうすればいいかわからなかった
	環境	6人用のテントでも3人が限界だ
	時間配分	就寝時間を守れなかった
	時間配分	朝、起床時間より早く起きてもいいのか分からなかった
	調理・食事	肉を食べたかった
	調理・食事	ご飯を作る際の火おこしに時間がかかった
	調理・食事	調味料（塩）を買うのを忘れて味が薄かった
	プログラム内容	屋外の遊びが少なかった
	プログラム内容	キャンプの定番（キャンプファイヤーなど）をやりたいかった
改 善 点	行動	各々、別々な行動を控える
	調理・食事	前日に食材を1つにまとめる
	調理・食事	食事の完成イメージを全員で共有する
	調理・食事	朝食と昼食を同時に作った際、昼食の保存方法を考える
	調理・食事	調味料を多めに用意する（昆布、塩、マジックソルトなど）
	調理・食事	お湯をいきなりたくさん沸かさない
	調理・食事	メスティンや鍋などを使ったお米の炊き方を把握しておく
	調理・食事	いつでも食べられる軽食を準備しておく
	道具	道具箱に番号や名前をつけて、みんなで分かるようにする
	道具	常に軍手を持つ

り返り、次回に組織キャンプを実践するとしたらどうするか、その改善点まで話し合った（表6）。環境面については学生自身ではどうすることもできないので、活動の大部分を占める調理や食事に関する改善点が特に多かった。ただ、反省点として屋外の遊びの少なさや、キャンプファイヤーのようないわゆるキャンプらしいアクティビティがなかったことが挙げられており、学生たちが思っていたキャンプとは合致した活動内容ではなかったのかもしれない。幸いにも、自分たちが計画したアクティビティについては計画どおりにすすめることができたため、キャンプとして全体的な満足度は高そうであった。振り返りによって見出された反省点や改善点を踏まえ、2年山下ゼミ有志2名の学生と共に、10月15日～16日にかけて、愛知県野外教育センター（愛知県岡崎市）にて1泊2日の野外キャンプを実践した。事前準備として、対象の2名と指導者（筆者）で集まり、施設の確認やアクティビティの検討などを行った。話し合った結果、このキャンプでは集合時間や入浴時間、解散時間などの施設利用の予約に関わる要件だけ大まかに決めておき、調理開始時刻やアクティビティの時間配分などについては詳細を決めずに、また食事のメニューについても当日その場で決めることとした。2日間の日程は表7のとおりである。食材を準備するにあたって、各々0.5合の米を持参することを依頼した以外は、すべて指導者が事前に準備して当日持参した。食材の選定で配慮したことは、パンやうどん、パスタなどの炭水化物、野菜類、肉類など、栄養バランスに偏りがなくメニューの幅が広そうだと思われるものを購

表7 22年度組織キャンプ（野外教育センター）の日程表

	1日目 (10/15)	2日目 (10/16)
6:00		起床/退去式
7:00		朝食づくり（ホットサンド、野菜と鶏肉
8:00		団子のスープ、魚肉ソーセージ入りオム
9:00	中京競馬場駅集合	レツ、餅巾着)
10:00	センター到着/入所式	アクティビティ（モルック、野点)
11:00	昼食づくり（焼きうどん、コーンスープ)	昼食づくり（五平餅、りんご)
12:00		
13:00		片づけ
14:00	アクティビティ（自然観察、探検)	センター出発
15:00		中京競馬場駅到着 解散
16:00		
17:00	夕食づくり（トマトソースのペンネ、豚	
18:00	タンと枝豆炒め、ちくわきゅうり、うどん	
19:00	入りみそ汁、バケット)	
20:00	星空観察/センターへ移動	
21:00	入浴	
22:00	就寝	

入した。また、メニューの幅を広げるとともに分量をわかりやすくかつ手軽に調理することができる、粉末状のコンソメスープや鍋物の固形だしなど、一人分が個包装になっているものをいくつか準備した。またすべての食材について、学生のうち1名がみかんのアレルギー持病があったため、成分表にみかんの表記がないものを選んだ。食事については多めに食材を準備していたこともあり、2日間とおして十分に満腹になった。また、日中は穏やかな天候であったが夕方以降は肌寒く



図18 夕食のペンネ（愛知県野外教育センター）

なったため、1日目の夕食のメニューは温かい汁物を作ることが1番に決まった。筆者自身、キャンプでパスタを作った経験がなかったため、試しに300gの乾燥ペンネを準備したところ思いのほか学生には好評で、美味しいトマト缶を用いたペンネを作ることができた（図18）。この施設ではテント泊を認めていないため、1日目の夜は併設の宿泊棟にて21時頃入浴後を済ませたのち22時には就寝した。2日目の朝食は各自で好きな具材（チーズ、ハム、キャベツ、ピーマンなど）を入れてホットサンドを作り、すでに成型されている鶏肉団子を用いた残り野菜をすべて入れた具沢山のスープや、オムレツなどを食べた。また朝食づくりと並行して、30分程度加水した米をコッヘルで炊きあげ、しばらく冷ましておいた。モルックや野点（一服椀と茶筌を持参）（図19）を楽しんだ後、あらかじめ五平餅用に削っておいた竹に冷ましたご飯をしっかりと握りつけ、赤みそを絡めながら昼食用の五平餅を焼いた。2日間とおして時間に束縛されることなく、ゆったりと過ごすことができた。また、2名の学生はすでに9月にセミナーハウスでの



図19 野点の様子（愛知県野外教育センター）



図20 火起こしの様子（愛知県野外教育センター）

学内キャンプを実践しており、2日間の時間の流れを理解しているように感じられた。特に、火起こしに関してはこの2名の学生は9月の学内キャンプの際に積極的に役割を買って出ていることもあり、戸惑う様子もなく手早く火起こしをすることができていた（図20）。参加学生の感想文を見てみると、「何回も火をつけていくうちにコツがつかめて楽しかった」と記載されており、やはり機会を何度も設けることで「できる」体験につながり、できるからこそ楽しさに結び付くことが再確認できた。また、「用意された食材でレシピを考えることがわくわくした」、「自然に囲まれてモルックをしたり、エアクッションに座って読書をしたり、のんびり過ごせた」、「委員会活動やレポートの締め切りなど時間に追われているので心身が休まった」、「ゆっくりのんびりたくさんご飯を食べることができて幸せだった」など、豊かな食事や時間の使い方についても述べられており、自由な時間設定やメニューによって心の満足度が得られることがわかった。

4 野外活動の場としての「自然」

2020年の1月頃から経験した自粛生活や遠隔授業、活動制限下でのゼミ活動などを通し強く実感したことは、野外活動というものは「場所や時間にこだわらず、環境を工夫すれば何とでもなる」ということだ。新型コロナウイルスが蔓延する以前は、野外活動というものは、「自然の家」や「野外センター」などのいわゆるキャンプ施設へ赴き、飯盒炊爨やネイチャーゲーム、キャンプファイヤー、テント泊などを実践する、そうでなければ「野外活動」とは言えないと筆者自身思い込んでいた節がある。

文部科学省⁽²⁾によると野外教育とは「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」であり、具体的には「キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動」としている。野外教育の「野

外」は「自然」とほぼ同意語として考えられ、野外教育の教材である「野外活動」は、自然環境を背景として行われる身体的、知的、情緒的、文化芸術的諸活動の総称とするのが一般的である⁽³⁾。

ではその「自然」とは、どこ（何）を指し示しているのだろうか。日本キャンプ協会が発行しているキャンプディレクターやキャンプインストラクター養成のためのテキスト⁽⁴⁾では、キャンプの種類や形態の分類に関して、キャンプが行われる地域や場所を強調する分類の例として、海浜キャンプ（海洋プログラムを中心に海辺や島などで行われるキャンプ）や山岳キャンプ（登山やハイキングといった山岳プログラムを中心に行うキャンプ）などを挙げている。これらのキャンプは、海、山、川、森林といったまさに自然環境そのものがプログラムの内容を決定づけており、どこ（の自然形態）でキャンプを実施するか非常にわかりやすい。

ちなみに、キャンプ場の立地について、キャンプ場整備という観点から見た立地の特性評価がある（表8）。とくに活動資源性については、キャンプ場に滞在中の付帯レクリエーション活動を支える条件ともなり、キャンプ場に加え敷地周辺の資源や施設も含まれる⁽⁴⁾。つまり、キャンプ活動を成立させるためには資源が豊富な場所を選択しなければならない。裏を返せば資源が豊富であれば、キャンプ場に限らずキャンプ活動は実施でき、例えば公的機関が意図的に確保した良好な自然環境である緑地公園や、教育機関の敷地内の自然であっても良いということになる。本学であれば、キャンパスを取り囲んでいる竹林やセミナーハウス付近の雑木林などが挙げられる。前述した近年の2年山下ゼミにおける組織キャンプの実践報告では、こういった学内の自然を活動の場としてきたが、学内を活用する一番の利点として、活動を繰り返すことができることである。キャンプを実施するためには、初心者であればあるほど、ある程度の施設設備が整ったキャンプ場へ行かなければ安全にキャンプ活動ができないだろう。だが、こういったキャンプを何度も実践するとなると時間もお金も労力もかかるため、たいてい1回の体験で終わってしまう。活動自体が単発で終わることなく、何度も野外活動を実践し経験を積み重ねるための工夫が必要となる。やはり、大学のキャンパス内の敷地を活用することは、時間やお金の面でも理にかなっていると言えよう。

表8 立地特性評価項目

到達・市場性	主要都市を含む市場の規模 主要都市からの到達時間 主要都市からの交通機関 最終ターミナルからの距離
活動資源性	周辺観光レクリエーション資源 水系の有無 動植物相の豊さ プログラム支援の人材の有無
生活・安全性	地形条件（傾斜） 生活のための水量 気象条件 森林など植生の状況 地形・地質面での安全性 危険な動植物の有無 周辺土地利用

（日本キャンプ協会 p. 64 「表8-1 立地特性評価項目をもとに作成」）

5 学内キャンプの可能性と課題

永山ら（2021）⁽⁵⁾の学内キャンプ実践の事例を見てみると、学内をキャンプ地として選択した経緯について、移手段と活動時間の確保が困難であったこと、経費がかかること、用具や安全面の確保に不具合があること、他の客との兼ね合いがあることなど複数の課題があったとし、それまでキャンプ地としていた近隣の山間の私営キャンプ場での活動を断念したことを報告してい

る。この研究でのキャンプは保育者志望学生を対象に、お泊り保育を想定したキャンプを実践しているが、レクリエーションやキャンプの専門科目ではないこと（資格取得に関与しない科目であること）や、自然体験には不十分であるが、組織キャンプの諸条件（日本キャンプ協会）は満たしていることを確認し、学生が学内に宿泊する機会は減多になく、非日常体験という観点から効果が期待できることを想定して実施に至ったようだ。キャンプ設備が整っていない学内施設であっても、保育内容の5領域のねらいを理解するには十分価値のある活動であったとしている。「他の客との兼ね合い」については、2年山下ゼミも何度か経験している。19年度の組織キャンプの際には他大学や小学校と日程が重なっていたため、センターの職員と入浴やキャンプファイヤーなどの時間調整やアクティビティなどの行動確認を入念に行い、団体同士でバッティングすることを回避した。また、22年度の2年山下ゼミの9月の組織キャンプが学内開催となった大きな理由は、9月のキャンプ場の予約が取れなかったことにある。ハイシーズンのキャンプ場に予約が殺到するのは当然ではあるが、キャンプ場にとって代わる場所が学内にあるのならば、学内を選択することも自然な流れだ。

久永ら(2017)⁽⁶⁾は、学校現場において台風や天候不順によって学校行事が中止してしまうことや、教員の異動の激しさなどによる指導技術等の継承が困難になることで、短期間にキャンプ実習等の高度な指導技術が必要な教育ツールを失うことなどを危惧しており、学校の中で行える学内キャンプの可能性を検証している。実際の自然の豊かな環境で行われているキャンプ実習の効果と比較して同等な教育効果があるとしており、学校現場においても校内キャンプの可能性が十分に示唆されている。杉山(2021)⁽⁷⁾の報告では、コロナ禍の下で貸し切りバスによる移動と宿泊施設での宿泊活動が行えないということを理由に、これまで学外にて実施していた野外活動を、学内において通学により行う活動に切り替え、グラウンドではキャンプファイヤーやジェスチャーゲームなどといったように、キャンパスを駆使して自然体験活動を実践したとしている。また、新型コロナ(Covid-19)の変異型が次から次へと出現する状況下において、教育課程の中で実施する集団の教育活動は形を変えざるを得ない⁽⁷⁾。行事の規模を縮小したり、内容を変更したり、中止延期を余儀なくされることはこれからも続いていくだろう。先行研究⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾のように、開催に至るために障害や困難を取り除き安全に開催するには「学内」という選択肢が出てくることも自然だ。本研究で紹介した2年山下ゼミの活動についても、安全面や金銭面、時間面など複数の観点から見ても、学外よりも学内で実施することにメリットが多かった。ただ、残念なことに、本学においてキャンパス内での宿泊を許可されている場所はセミナーハウスのみとなっており、キャンパス内であっても屋外のテント泊は認められていない。故に、22年度の学内キャンプはセミナーハウス内にテントを立てて就寝したが、それでも仲間と教育活動の中で宿泊体験をすることができることには価値があり、この経験があったからこそ学外のキャンプ地の活動へ知識をつなげることもできた。文部科学省⁽⁸⁾が体験活動（自然教室や臨海学校のように、それ自体、目標や指導計画、指導体制、全体の評価計画などを持つまとまりのある教育活動）について、豊かな人間性や自ら学び、自ら考える力などの生きる力の基盤、子どもの成長の糧としての役割が期待されているとしていることからわかるように、学校教育の中で野外活動が担う役割は非常に大きい。場所や時間の制限によって学びの機会を失うよりも、身近な環境でできること

を見つけていくことに意義があるように感じられる。

ここで大学キャンパスを活用したキャンプに関する取り組み事例を紹介する。新潟工科大学⁽⁹⁾では、自然に親しみ、仲間づくりをサポートすることを目的に、学内にキャンプ場の整備やキャンプ場のデザインコンペやキャンプイベントの開催、キャンプグッズの作成・開発をする「プラスアルファ制度」という正課外活動がある。具体的な内容は、大学キャンプ生活をするにあたって、どんなことをしてみたいか意見を出し合うワークショップや、株式会社新越ワークスのアウトドアメーカー部門であるユニフレームの協力のもと、テントや火起こし、調理、コーヒーを入れるといったキャンプギアの体験などだ。また、2022年の夏には大学内にキャンプ場を整備し、学生たちは宿泊をしたり、イベントの打ち上げをしたりと、様々な形で使用しているようだ。関西学院大学⁽¹⁰⁾では、2020年に株式会社スノーピークと連携協定を締結し、教育にキャンプという手法を取り入れた「Camping Campus®」という取り組みを神戸三田キャンパスで行っている。2022年度4月には1年生を対象とした日帰りのデイキャンプを実施しており、プログラムはスノーピーク社員による指導のもとでのテント設営や、スパイスカレー作り、テント内でのディスカッション、焚火を囲みながらのフリートークなどで、参加した学生からは好評だったことを報告している。本学のキャンパスにおいても竹林や開けた芝生、グラウンド、ゴルフ場など、キャンプ活動に最適な場所がいくつかある。先述した2年山下ゼミの活動は、これらの自然や施設設備を活用しているわけだが、先述のとおり宿泊可能な施設が限定されていることや水道の確保、トイレなどの生活環境の整備など、キャンプ地とするにはまだまだ課題が残る。

ほかにも学内におけるキャンプ実践として、法政大学⁽¹¹⁾では継続的に「防災キャンプ」を行っている。この活動は、教室や武道場など学内の施設を活用して、CPRやAED訓練、大学の防災対策、三角巾訓練、寝場所づくり、簡易トイレづくりなど一泊二日のプログラムとなっている。大学は災害対策の基点となることもある。そもそもキャンプ（アウトドア）はライフラインのない（もしくは最小限の）自然の中で衣食住を組み立てることを楽しむ⁽¹²⁾活動であり、そういった活動の経験があるかないかで、災害時の対応力が変わってくるだろう。鹿野ら（2021）⁽¹³⁾の防災教育に関する先行研究においても、内閣府が制作した南海トラフ巨大地震を想定した17分のシミュレーションCG動画（南海トラフ地震が発生した際にどのような被害が生じるか）の視聴によって、具体的な対策や知識が得られたと報告している。短時間の動画視聴だけでも教育効果が見られるならば、実際に防災教育を体験すればより高い教育効果が得られるだろう。教育的な野外活動に限らず防災のためにも、キャンパス内で火を扱える場所や水を汲める場所、テントやタープを張れる場所などを確認し、日ごろから訓練をすることでいざという時に対応できるよう準備しておくことも野外教育の課題である。

6 まとめ

本研究は、19年度から22年度にかけて2年山下ゼミで実践した野外活動を整理するとともに、大学のキャンパスを活用した野外活動の課題を明らかにすることを目的に検討を行った。学内の自然を活用した野外体験活動は、コロナ禍であっても遂行することができ、むしろ学外へ行くリ

スクがないことから、幅広い内容で展開することができていた一方で、宿泊を伴う組織キャンプについては、その時々活動の制限によって中止したり規模を縮小したりと、コロナ禍以前同等とまではいかなかった。しかしながら、学内施設を活用した組織キャンプを行ったり、人数を制限あるいは部屋割りを工夫することによって学外であってもキャンプを実施することは可能であり、他大学の活動状況⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾から見ても、学内をうまく活用することで、安全に野外活動を実施することが可能であると考えられる。また、野外教育だけでなく、防災教育の観点からも学内においてキャンプを実施する重要性が伺えた。

7 おわりに

コロナ禍によってアウトドア需要が高まった一方で、「インドアキャンプ」という言葉を耳にするようになった。私自身、2022年度には「インドアキャンプ」に関する一般の方向けの講演会や小学生とその保護者を対象とした実技の依頼があり、室内でキャンプをすることはどうしたことなのか、自問自答しながらプログラムを練った。講演では防災の観点も踏まえて、自炊が室内でも屋外でもできることを確認することや、チェアリング（好きな場所に椅子を置いて趣味を楽しむこと）のような手軽な時間の過ごし方を知っておくことの重要性などについて説いたが、本当に大事なことは、どのような環境であってもそこで自分が思い描いたプログラムを実行できるかどうかではないだろうか。とくに、学内での組織キャンプの経験から、置かれた環境の特性を理解し、その環境を使いこなせたかどうかで学生の満足感が高まるように感じた。本研究をとおして学内にキャンプ地を作ることが筆者にとっての当面の目標になったが、学生がキャンプに興味関心をもつためのきっかけとなるように、固定観念を持たずキャンプの可能性を探っていきたい。

参考文献

- (1) 名古屋短期大学（2022）名古屋短期大学2022 Campus Life Guide 「学生生活 13. 施設」、pp. 182-183、名古屋短期大学（愛知）
- (2) 文部科学省「青少年の野外教育の振興に関する調査研究者会議 1. 青少年と野外教育」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701b.htm（最終閲覧日2022年12月27日）
- (3) 星野敏夫、金子和正（2011）野外教育の理論と実践、p. 1、啓林書院（東京）
- (4) 日本キャンプ協会テキスト編集委員会（1998）キャンプディレクター養成キャンプ専門科目テキスト、p. 1, pp. 63-64、日本キャンプ協会（東京）
- (5) 永山寛、瀬尾賢一郎（2021）保育者志望学生のお泊り保育を想定した学内キャンプの検討—保育内容総論の視点からの一考察—、九州大谷研究紀要47、pp. 126-142
- (6) 久永哲雄、崔玉芬、高瀬博、竹澤稔裕、窪田友樹（2017）学内キャンプ実習のカリキュラム開発と効果について—大学生を対象にした特別活動の試み—、関東学園大学紀要25、pp. 15-28
- (7) 杉山浩之（2021）新型コロナウイルスの下での大学キャンパスにおける「野外活動」の実践と課題、広島文教教育36、pp. 95-99
- (8) 文部科学省「体験活動事例集—体験のスズメ—（平成17、18年度 豊かな体験活動推進事業より）1.1. 体験活動の教育的意義」https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055.htm（最

最終閲覧日2022年12月27日)

- (9) 新潟工科大学 大学公式 Web サイト「正課外活動 大学キャンプ生活」<https://www.niit.ac.jp/plusalpha> (最終閲覧日2022年12月27日)
- (10) 関西学院大学 大学公式 Web サイト ニュース「キャンプを通して大学生生活の夢を分かち合う KSC で「1 Day Camp」を開催 (2022年4月27日)」<https://www.kwansei.ac.jp/news/detail/4636> (最終閲覧日2022年12月27日)
- (11) 法政大学 大学公式 Web サイト「ボランティアセンター PickUP【市ヶ谷】チーム・オレンジ 企画「防災キャンプ」を行いました (10/2・3)」<https://www.hosei.ac.jp/volunteer/pickup/article-20211014163343/> (最終閲覧日2022年12月27日)
- (12) 寒川一 (2021) キャンプ×防災のプロが教える新時代の防災術、p. 3、学研プラス (東京)
- (13) 鹿野翔太、古賀佳樹、川島大輔 (2021) 大学生を対象とした防災教育の効果検証、中京大学心理学研究科・心理学部紀要20(1)、pp. 63-69

(受理日 2022年12月28日)